ハンセン病資料館
不当解雇学芸員を支援する会

ニュースレター
第４号
発行日：2022 年 1 月 22 日

調査は結審！ 公正な命令を求める要請署名をはじめました

「東京都労働委員会は日本財団と笹川保健財団の不当労働行為を認め、稲葉さんたちを職場に戻す命令を出してください」

2021 年 11 月 16 日、東京都労働員会における調査が結審しました。2022 年春頃には命令が出される見込みとなっています。約 1 年半にわたる調査と審問により明らかになった事実に基づいて、公正な判断を行うよう求める署名を集めています。

映画「あん」の舞台になった国立療養所多磨全生園はハンセン病の療養所です。主人公徳江さんは、国の誤った政策（2001 年国賠償訴訟で国が敗訴して判決は確定しています）で、教師になる夢も奪われ、ずっと全生園に生き、亡くなります。

国は、ハンセン病が遺伝ではなく伝染病であるとの国民的な理解を導く力があったのに、伝染力が弱いのに故意に伝染力が強く怖い病気であると喧伝し、偏見差別を誘導し続けました。治る病気になっても「無ライ県運動*」を続けることで偏見差別をさらに固定し、病気にかかった人の人生を奪いました。

しかし、入所の方たちは、自分たちの状況を人間的なものにするために立ち上がり、治療薬を手に入れたり、重監房と言われた特別病室を廃止したり、患者作業の廃止などを求めて闘い続けてこられました。

治る病気になり、新しい患者さんも発生しなくなったころ、このままでは国にこの事実を隠し続けられて、なかったことにされてしまうと思い、自分たちの生きた証を残そうと資料を自分たちで集め、作られたのが今の資料館の前身の「高松宮記念ハンセン病資料館」でした。

そして国立ハンセン病資料館として、国民の人権学習にはなくてはならない大切な資料館になりました。その資料館の中で、パワハラ、セクハラなどが頻繁に起こるようになり、労働組合を結成し団体交渉などでその解決に向かったところ、二人の学芸員は解雇されました。

このお二人の学芸員さんたちは、企画展「たたかいつづけたから、今がある―全療協 60 年の歩み」（2011 年）や企画展「『望郷の丘』―盲人会が遺した多磨全生園の歴史」（2019 年）など、ハンセン病当事者が人権を自分たちの手で取り返してきた姿を伝えようとして来られました。歴史を語り継ぐべき資料館にはなくてはならない方たちと考えています。お二人とも、戻る場所が例えひどい労働環境であったとしても、入所の方々や納骨堂で眠る先輩たちに恥ずかしくない仕事をしたいと言っています。

*無ライ県運動：戦前は警察主導で、戦後は保健所を中心に展開された患者狩りの運動です。各県からライ患者をなくすために病人を探し出し、死ぬまで閉じこめて伝染病の解決を実現しようとした運動

◆報告集会に出席しました◆

東京都労働委員会の結審を受け、11 月 28 日に報告集会が開催されました。

これまでの経過報告と合わせて、稲葉さんよりハンセン病資料館のあらまし、支援者からの応援メッセージなどが語られました。

ご支援ありがとうございます！

2022 年 11 月末までに

270 万円

を超えるカンパをいただきました。

ご協力に感謝いたします。
引き続きよろしくお願いします。

【収支報告】2020 年 9 月～2021 年 11 月

繰越金	245,506 円
収入	2,711,609 円
支出	2,466,103 円

※主な支出先：
二人への生活支援、弁護士費用、印刷費
通信費等

■経過

2020 年

3／24　笹川保健財団が学芸員 2 名を不採用
3／27　全療協事務局長より笹川保健財団理事長と資料館事務局長に不採用の理由を質問
➡未回答のため**不当解雇**とみなすと通告
4／15　笹川保健財団と第 1 回団体交渉
5／8　東京都労働委員会に不当解雇撤回の申立
9／2　東京都労働委員会第 1 回調査
10／15　東京都労働委員会第 2 回調査
12／1　東京都労働委員会第 3 回調査
12／3　日本財団・笹川保健財団前抗議行動

2021 年

1／25　東京都労働委員会第 4 回調査
3／29　東京都労働委員会審問（1 回目）
4／5　東京都労働委員会審問（2 回目）
5／31　東京都労働委員会第 5 回調査
7／15　東京都労働委員会第 6 回調査
9／13　東京都労働委員会第 7 回調査
11／16　結審

コラム　盲人会をご存知ですか？

ハンセン病に効く薬がなかった頃、病気が進行して失明される方たちがたくさんいました。彼らの介護は患者作業とされ、手がかかるところから入所者からも下に見られたりしていました。特効薬が見つかり治る病気になり、後遺症も軽く治った人たちは退所したり、収入を得るために療養所の外に働きに行きました。東村山市や、東久留米市など近隣の公団住宅の建設現場は全生園入所者の働く場所でした。

介護が園内作業だったため、盲人たちの介護をする人たちは少なくなり、視覚障害を持つ彼らはどうにかしなければならないと 1955 年「多磨盲人会」を 159 名で結成しました

団結して初めて**白杖***を獲得し、**舌読**での点字の学習会や、**多磨盲人会ハーモニカバンド**などの生活の向上を獲得できたのです。

担い手の少なくなった自治会が閉鎖になって、再開する時には盲人会はその中心にいました。資料館の出発であった「ハンセン氏病文庫」も視覚障碍者であった松本さんが自治会長の時に始まりました。彼らの活動抜きに多磨全生園を知ったことにならないでしょう。

*当時園内で使われていた杖は、木や竹で作った手作りの杖でした。

ハンセン病資料館
不当解雇学芸員を支援する会

https://against2020hansens-issues.info/
against2020hansens.issues@gmail.com

◆ 応援してくださる方々へカンパのおねがい ◆

ゆうちょ銀行　〇一九(ゼロイチキュウ)店(019)
当座:0364317
名義)ハンセン病資料館 不当解雇学芸員を支援する会